

超高齢者社会（9月号）

小野町の総人口に占める65歳以上人口の割合は、昨年の9月1日現在では26・2%に達しました。住み慣れた地域や家庭で、健康で安心して生活ができる環境や、地域社会の担い手の一員として、その経験や知恵を活かしながら、充実した人生を営むことができる社会を実現していく必要があります。



東京都荒川区には、80を超える高齢者クラブがあります。平成14年4月には「NPO法人荒川区高齢者クラブ連合会」を設立し、本年2月からは、荒川区のコミュニティ施設「荒川山吹ふれあい館」の指定管理者として、施設の管理運営を行っています。高齢者のクラブが公の施設の指定管理者となるのは、全国でも珍しいことです。

交流人口の拡大（10月号）

人口減少時代において地域活力を維持する、あるいは活性化するための方法として「交流」の果たす役割・期待は大きなものがあります。

交流人口を拡大するためには、地域を見つめ直し、資源を見つけて磨きをかけ、地域の宝として育てていくことが重要なことです。風景、風土、風味、風習など、この地域・場所でなければ感じるもので、きないものがきつとあるはずは、



東京都荒川区で開催された「ふるさと暮らしセミナー」で、小野町へ移り住んだ方が、町の魅力を次のように紹介してくれました。

「『会津の三泣き』という言葉がありますが、小野町にも三泣きと言える人情の深さがあります。『小野町は冬の寒さは非常に厳しい、しかし、寒さは厳しくても、住んでいる人達の人情は本当に温かい。』
交流にはずっと住んでいる人が気付かない『地域の魅力』を引き出してくれる、そんな力があるのかもかもしれません。」

産業の振興（11月号）

たくましい産業づくりを進めるためには、地域の特性を活かし、時代の変化にも対応できる産業の振興、育成が極めて重要な役割を担っています。

また、安定した就業機会の場の有無は、定住条件の一つにもなっています。農・商・工さらに観光を含めた各産業において、調和のとれた産業振興施策が必要です。



ゆずで30億円を売り上げている高知県馬路村。その戦略は「商品ではなく村を売る」という、産地を前面に出したイメージ戦略。

循環型社会の形成に向けて（12月号）

地球規模で環境問題が叫ばれる今、循環型社会の形成が一つのキーワードになっています。

循環型社会を構築するためには、私たち一人ひとりの取り組みが大切です。第一歩は「気づく」こと。そして気づいたら意識して行動すること。今すぐに始められることから、一歩ずつ進んでみましょう。

住民参加のまちづくり（1月号）

現在の私たちの生活の成り立ち、公共サービスと市場サービスの2極化が進みつつあります。かつては「地域」という担い手がありました。「結い」や「講」といった、お互いに助け合い協力し合う地域社会です。

自分の住む地域で、今何が起きているのか、将来的に何が課題になるのか。自分の地域を知ることとは、大変重要なことです。知るべきかが見えてきます。

まとめとして

シリーズの中で事例として紹介した、徳島県上勝町をはじめ、地域課題を解決し地域発展に結びつけた形は様々あります。成功した地域に共通するものは、自分の地域の持つ個性や強みを十分に活かし、地道に実績を積み上げていることです。

そして、住民の力、地域の力が原動力になっています。

小野町のキャッチフレーズ「笑顔とがんばり」で、この地域を今より損なうことなく、より良く、より美しくして次世代へと引き継いでいきたいと思います。